

築地本願寺「納涼盆おどり大会提灯」の揮毫： 伝統文化の継承と書の実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教育学研究所 公開日: 2026-03-24 キーワード: 作成者: 廣瀬, 裕之(舟雲) メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000871

【制作ノート】

築地本願寺「納涼盆おどり大会提灯」の揮毫 —伝統文化の継承と書の実践—

Calligraphy for the "Summer Bon Festival Dance *Chochin*
(Lantern)" at Tsukiji Honganji Temple:
Inheriting Traditional Culture and Practicing Calligraphy

廣瀬裕之(舟雲)*

HIROSE Hiroyuki (Shuun)

はじめに

本年4月、築地本願寺より、「盆踊り大会の提灯を本学の学生に揮毫していただけないか」という依頼が本学学生支援課を通して本学書道部にあり、同部長を通じて、顧問の私に相談があった。理由は何十年も提灯等を専門に揮毫されて来られた職員の方が70歳を超えられたのでそろそろ引退したいとおっしゃっておられるからだという。日本文化を直接体験するには、この上もなく良い機会であり、たいへん有難いことだと思った。しかし、飾られる所が、東京中央区の築地本願寺境内という都内屈指の有名な場所であり、学生たちが書いたものが飾られて大丈夫なものかという点が気がかりであった。書道部員の学生であっても、提灯を書いたことのない学生がほとんどである。お声がけいただいたのは光栄なことだが、ある程度の書技が高い者でないと、書いたとしてもご意向に達していないものとなる可能性も考えられ、その場合たいへんご迷惑をおかけすることになる。どうすればよいか困惑した。私はかつて提灯に揮毫したことがあるが、ふつうの平面の紙に書くのではない。出来上がった提灯を上下に長く引き伸ばして、その「竹ひご」のような針金が入った凹凸のある曲面に、雨で濡れても落ちないように濃い墨の様な、どろっとした塗料を用いて揮毫するのである。よって、筆法も平面紙に書くのとは大いに異なる。それより、どのような書体で書くことになるのか、ここが一番心配な点であった。やはり不安は的中で、普段、書道部では、楷書・行書・草書の臨書と漢字仮名交じりの書の制作が中心であるのだが、問い合わせると「隷書」でお願いしたいとのことであり、部員でも隷書が得意な学生は僅かなので、ここから乗り越える必要がある。もし、お引き受けしていくためには準備と揮毫するための体制作りを考えることが必要で、こちらとしてもかなりの覚悟が必要なが判ったのである。

作業内容と日程の調整

まずどのような形の提灯をどのような用具用材で、いつ頃から書き始め、いつまでにお届けするという期限。何個ぐらい揮毫することになるのかなど、作業をお引き受けするために必要な事項である。築地本願寺といえば、東京築地界隈では一番大きな寺院である。会場に、とてもたく

* 武蔵野大学教育学部

さんの提灯が吊り下げられているに違いない。生半可なことでは恥をかくので、こころして取り組まねばならないと考える。

まず盆踊り大会の開催日程は、今年度（令和7年）の場合、7月30日（水）～8月2日（土）の4日間とのこと。どんなに遅くともその1週間前には仕上げたものをお届けしなくてはならない。7月末は、前期のテスト期間であるという点も考慮に入れなくてはならず初めてのことだらけなのである。よって築地本願寺へ行って関係職員の方々とお会いしてご相談しつつまずはレクチャーを受けるのが一番と考え、お寺側と、私と、しっかりと揮毫してもらえそうな部員数名の日程の調整をしていただいた。そして、書道部で毎日書道展出品作を仕上げた後、5月は、書道部の学生全員で、典型的な隷書である八分隷の揮毫特訓を開始した。「乙瑛碑」「礼器碑」などの古典臨書も試みたが、短い期間での練習では到底間に合わないの、お互い学生同士の氏名や、「株式会社〇〇」など会社名を想定して八分隷で揮毫してみる実践的な特訓をした。即戦力養成には程遠かったが、縦画・横画の書法、そして波磔はどこにつけるのかなどを集中的に学習した。まだこの段階では隷書の筆法ですぐにいろいろな文字を揮毫するには心もとなかったが、意気込みが高まると同時に徐々に上達していった。

築地本願寺でのレクチャー

5月31日（土）に、書道部員の学生たちとともに築地本願寺へ打ち合わせを兼ねた予行練習に出かけた。寺務室でご挨拶をしたのち、ずっと永い間、ここで提灯等の揮毫を担当されて来られたベテランの職員の方とお会いし、提灯揮毫のしかたのレクチャーを受けた。同寺第2伝道会館内の1階ロビーにブルーシートを敷かれ待機されておられた。まず、揮毫された提灯と木札を私たちにみせてくださり、特殊な専用棒を提灯の内部に差し込んで、提灯を伸ばして固定し、揮毫しやすくする方法から教わった。かなり伸ばすのに力とコツがいる。うまく差し込み固定できると揮毫しやすくなるのだが、この力加減が難しかった。そして用具の説明の後、実際に模範揮毫をしてくださった。長年揮毫されて来られた名人なので凹凸のある面に文字が載り、ピタリと決まっていた。やはり黒い専用塗料を用いての毛筆での揮毫であった。その後、学生たちも提灯の揮毫に挑戦した。隷書の練習を事前にしていったので、お寺の方々に褒められほっとした。漢字のみなら隷書での揮毫は比較的楽に書けるようになったが、揮毫する台帳を拝見すると、カタ

▼写真1 築地本願寺でベテランの方よりレクチャーを受けているところ

①提灯



②木札



▼写真2 提灯の揮毫練習をしたもの（学生の試書に対してそのすぐ左側に大きき見本として揮毫した廣瀬の範書）



▼写真3 納涼盆踊り大会入口風景



▼写真4 会場の中央付近の提灯



▼写真5 写真3左下の提灯（部分）



カナや、ひらがな、アルファベットなど様々な文字を隷書に近い書体にして組み合わせなければならぬことが判った。またご奉納くださった方々のお名前を記す木札(写真1の②)の書き方もご教示いただいた。

本学書道教室での揮毫

本学に必要な物品(提灯・棒・塗料など)を送っていただき、7月17日(木)以後何回か学生たちに書道教室に集合してもらい、実際に提灯に揮毫した。半紙等に練習してから提灯に揮毫したが、学生たちの揮毫が始まった。垂らさないように注意しつつ表と裏の2回同じ語句を揮毫する。そのため、塗料が乾くのに一晩は掛かるので、綱を教室内にはって、それぞれが接近しないように注意して書き上げるごとに吊り下げていった。あくる日、乾いているかよくチェックしてから注意深く取り外し、書いたものの全部を箱に梱包してお寺へ送付した。提灯を伸ばす棒の数が多いほど作業効率が上がることが判った。

築地本願寺盆踊り大会会場へ

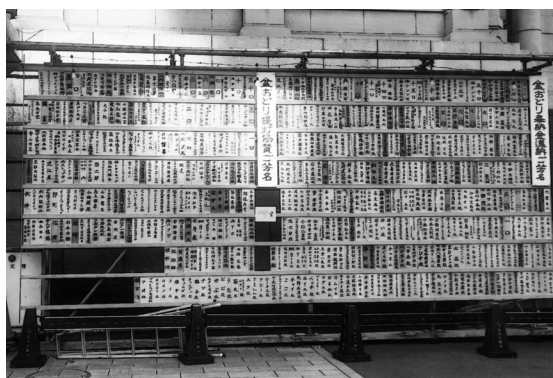
大会の最終日8月2日(土)となるのだが、揮毫してくれた大学生にとって、ようやく前期のテスト期間が終了するからこの日に!との要望で築地本願寺正門前に午後5時に集合となった。初日にお伺いしたかったのだが学生である以上、学業への配慮も優先事項である。

自分の揮毫したものがどこに吊り下げられているのか探すのが大変なほどのたくさんの提灯が吊り下げられていた。見つけると、書を勉強したことによって実際にお役に立てたという感激でとともうれしくなった。築地本願寺カフェ TSUGUMI の屋上の境内を一望できる特別席にご案内くださり、しばし感慨にふけることができた。夕暮れ時となり、暗くなってくると提灯の中の電灯がととり、より一層幻想的な世界に導かれるのであった。祭太鼓の音も大きくなり、人込みもだんだん増えてきた。

まとめ

日本文化の一つの提灯の揮毫をさせていただいたこと。そして吊り下げられた場所を実際に拝見できたこと。この経験はとても大きなことと考える。きっとさらに書に対する関心を高めることにつながったと考える。一つのことを成し遂げることができた喜びが書を含め新たなことに挑戦する契機ことにリ

▼写真6 協賛者ご芳名の木札



ンクしていると考える。今回は初めてということもあり少数の提灯の揮毫をベテランの職員さんのご指導のもと手伝わさせていただいたが、次年度よりは写真6の木札を含めて書くこととなり、提灯の数も増えることとなる。伝統文化の継承は、その担い手を見つけるのがとても難しい状況となっている現在、本学の書道部員の学生がどれだけお力になれるかわからないが、私としては自ら意欲的に取り組む姿勢の学生をできるだけ育てていきたいと考えている。